

## 順位関係の態様の集団間比較

### 一勝山集団と淡路島集団において一

藤井 尚教 (阪大・人間科学)

小山 高正 ( " )

これまでの餌付けニホンザル集団の比較研究から、淡路島集団 (A) は、密集性が高いにもかかわらずトラブルの少ない特異な存在であることがわかり、勝山集団 (K) のような密集性が低くトラブルも少ない集団とは、集団成員の順位関係の態様 (あり方) が異なっていると考えた。そこで、本実験では、2 個体間に餌を投与して、操作的に惹起された緊張事態がどのように解消されるかを、両者の表出行動に注目し、VTR で記録されたものを社会的地位、性、年齢等の側面より分析し、2 集団の順位関係の態様を比較した。集団の大きさは、A: 109 頭、K: 211 頭。実験例数はそれぞれ、199 例、155 例である。

結果は、① 2 個体間に餌を投げた時、K では優位個体が 100 % 餌をとったが、A では 84.6 % であった。② 優位個体の接近に対する劣位個体の後退は、K では 90.1 % 見られたが、A では僅か 49.6 % であった。しかも、A の高順位メスには、flight posture, gaze avoidance 等の位置移動を伴う劣位行動が多かった (65.4 %)。劣位個体の後退する距離も、K は 2 m 以上であるが、A では 1~2 m にとどまる。③ facial expression (silent bared teeth, scream bared teeth) の表出は、A は少なく (6.5 %), K では多い (29.7 %)。また A では、性差があり、メスのみである。④ 劣位個体の第 3 者への変向攻撃の生起も、A では少なく (3.6 %), メスだけに見られ、K ではオス 33.3 %, メス 16.1 % であった。

以上の結果より、両集団の順位関係の態様には、明らかな差が見られ、それらは主に劣位個体の順位関係の認知の差として表われた。このような順位関係の認知の特殊性は、集団に特有な行動様式の 1 つとして定着しているものと考えられる。そこで A では、優位個体の劣位個体への接近が、K ほど両者の間に緊張状態を惹起しないので、とり得る個体間距離も短く、またそれによって起るトラブルも少ない。そのことが、両集団における密集性とトラブル量の差に反映したと思われる。

### 屋久島亜熱帯林に生息するヤクザル地域個体群の構造

#### (野生ヤクザルにみられた分裂現象について)

山極 壽一 (京大・理)

黒田 末壽 ( " )

屋久島西部原生林に生息しているヤクザル地域個体群

を、社会学的・生態学的に調査する目的で、1977 年 7 月より 1978 年 1 月までの 7 ヶ月間の連続観察をおこなった。1975 年から人づけのおこなわれている K<sub>0</sub> 群の分裂を、調査開始後に確認し、9 月から丸橋と共同して、分裂した 2 群および隣接群の同時追跡によって、分裂機構の解明を試みた。観察事項を挙げると、1) 分裂した 2 群の遊動域は、分裂前の遊動域からはみ出ることはないが、隣接群 (H<sub>a</sub> 群, N<sub>i</sub> 群) が重複域を超えて侵入する例がみられた。2) 各群の構成は、交尾期の開始とともに次第に安定し、互いに回避し合って遊動するようになった。2 群の出会いには、はっきりした敵対的な行動はみられなかった。3) 2 群間には、メンバーシップの固定性、サブグルーピングの頻度、群れ内成熟オスの数、交尾期に接近した群れ外オスの数と群れ外オスに対する群れ内オスの許容性、交尾期の開始時とその進行、発情メスの数、外婚率、発情メスの群れ内オスに対する受け入れ態度、交尾パターン、木ゆすり行動の数と種類、休息場におけるまとまり方等に顕著な相違が認められた。4) 交尾期の後半に、主群では、特定の発情メスが群れ外オスによって群れから引き出され、さらにもう一頭のオスの加入とともに第 2 の分裂現象が固定化する傾向が明らかになった。5) メスの発達段階 (子供, 若年, 若成年, 成年, 老年) にはそれぞれ特徴的な行動様式や交尾の型を認めることができ、群れの統合や分裂、交尾期における群れ間および群れ外オスとの交渉等に、各段階のメスに固有の機能的役割を類別することができる。

こういった 2 回の分裂現象の観察事例から、われわれは次のような考察を加えた。1) 多数の隣接群をもつヤクザル野生群のこの 2 回の分裂は、ポピュレーションの増大によって引き起こされたものではなく、交尾期に群れ外オスが発情メスを引き出すことによって起こったものであり、おそらくこれが分裂の一般的な形態であると考えられる。2) 分裂後の遊動域は、分裂前の遊動域を出ることはないが、隣接群からの侵入が認められ、これは新しい群れ間関係の変動と再編を示す現象とも考えられる。3) 分裂は、メスを引き出したオス以外の群れ外オスが加わることによって、固定化する傾向をもつ。このオス間には、大きな優劣の落差があって、多くのシチュエーションでそれぞれが異なった行動をすることが観察されるが、2 者間で直接的な交渉はもたない。この優位なオスと劣位なオスのペアは、他の隣接群の多くに認めることができ、この 2 者の間接的な交渉によって群れの統合が維持されていると考えられる。4) 成年オスを唯一頭含む群れ (分裂した主群) は、2 群の比較からみて、特に交尾期に非常に不安定な統合状態を示し、そのオスと群れ外オスとの敵対的な行動、外婚率の増加傾向が顕著になり、2 回目の分裂が起った。一頭のオスによ